びぶりおてか

同志社大学図書館報　No. 20.　1976.　10. 1

爽　秋　所　感

図書館長
三　木　英　雄

秋晴れの新学期を迎え，図書館の各閲覧室も再び活気をとり戻している。もう〝新〟という字をつけるのも終りにしたい現図書館だが，開館以来国内各地からはもちろん，外国からの見学者・視察者がひっきりなしに訪れ，三年を経ようとしている今日でさえ，まだまだ終結しそうにない。それほど優れた機能を具えた図書館をつくり上げるのに，十年前，当時の小橋館長を中心とした一同の努力によって創刊号が出され，大学図書館のあり方を地道に語り続けた「びぶりおてか」の果した役割りを忘れてはならないし，今後とも，これからの図書館の課題について考え続けてほしいものである。

旧図書館（有隣館閲覧室）跡に，新らしい法経研究室・光塩館の完成も間近い。研究用図書室としての機能が充分に発揮されるであろう。教育・研究環境が一歩一歩進んでゆくことは何と言っても欣ばしい。ところで，見通しというものは往々にして適中しない。だからこそ，遅すぎない時期に適切な軌道修正を施す必要がある。当初10年は大丈夫と考えられていた地階書庫が案外早く，そろそろ満配になろうとしているし，貴重図書・文庫の収蔵も再検討の必要に迫られている。

限られた人員で，図書館サービスの向上を実現し増大する図書業務を処理することを可能にするための電算機利用等の業務機械化も真剣に取り組まなければならない，これらもろもろの問題を検討する時期が到来したようである。

「びぶりおてか」発刊のころ

法学部 教授　小　橋　一　郎

「びぶりおてか」20号を記念して何か書けというご注文である。年２回の発行だから10年近くになる。いちおう思い出話にならざるをえないが，済んだことはさっさと忘れるたちなので，回顧は苦手である。思い違いだらけであろう点はお許しいただきたい。

法経研究室が建てられることになり，わが法学部内でも図書運営の話が出る。私の意見がさっぱり通らないので，「私は図書館長をしたことがあるのだ」というと，「そうですか」と不思議そうな顔をされる。新人が増えたせいもあるが，図書館長という重厚な役職には似つかわしくない人間であることが主な原因であろう。昭和42年５月，当時の星名学長が，同志社大学へ来てまだ４年に足らない40才を越えたばかりの私を館長に任命された理由は，今もってわからない。それを臆面もなく引き受けた当時の自分の心境も思い出せない。何しろずぶの素人で，和書にしろ洋書にしろ書物の顔を見ただけで分類できるということが神業にみえる。そういう新米館長に対して，館員のみなさんは，懇切な図書館教育を施された。いわく，図書館は，図書を整理し閲覧に供するだけのところと考えてもらっては困る。むしろ研究情報センターであるべきである。――レファレンス業務は，今後きわめて重要な分野である。――開架式が基本とならなければならない。――視聴覚資料の収集・利用を考える必要がある。――講義・演習との連係がはかられなければならない。――各大学の図書館がそれぞれ乏しい予算で同じような図書を購入しているのは，無駄ではないか。他の大学図書館との協力・交流が必要である。そのためには本学蔵書目録の作成が前提になる。――学内図書行政のあり方を総合的に検討する必要がある。――学内雑誌目録の作成が必要である。――図書館業務の現状や意義が一般に十分知られていない。館報の発行が考えられるべきである。――新図書館建設が緊要である，等々。いずれももっともな主張が語られ，それらの実現を阻む隘路が指摘された。

新米館長の任務はただ一つ，館員のみなさんの正当な主張と要求を実現すべく努力することであると心得た。それにはまず，何事につけ部長会の承認をとりつけなければならない。課長さん方（現在の青木文学部助教授，日置経済学部事務長，板垣厚生館事務主任である）に，「しっかりやってくるんですよ」と背中をたたかれて，有終館の会議室へ走るのである。館員のみなさんは，頼りない思いをされたことだろう。当時の部長会では，私は最年少であったと思う。それに，図書館長は役職手当も学部長や教務部長・学生部長より安い（今もそうかどうかは知らない）ということでも，部長会での位置づけが表現されている（と当時は思った）。それでも新米館長がまくし立てると，当時の部長方はニヤニヤしながら，あまり金のかからないことであれば諒承してくれた。もっとも館報の発行は，簡単に認めてもらったのか，そもそも部長会の承認を得る必要がなかったのか，記憶は定かでない。蔵書目録・雑誌目録の刊行は，いささか予算も張って，一回では決まらなかったが，何とか聞き入れてもらった。新図書館建設の基本方針も確認された。基本方針を確認するだけなら，金はかからない。しかし私の在任中に実現したのは，けっきょく図書館報「びぶりおてか」の創刊号と第２号の発行だけであった。創刊号に僅か数行のそっけない発刊のことばを書いているが，内容が問題であいさつなど簡単でよいという気持が生意気に出ていて，汗顔の至りである。

私の在任は，昭和43年３月まで１年足らずであった。図書館業務は，もともと付け焼刃であったし，もうすっかり忘れてしまった。けれども当時館内で親しくしてくださった方々に今もなおあたたかく接していただけることは，何にも代え難い喜びである。私の退任後，重厚な館長（徳永先生，原先生，遠藤先生，三木先生）のもと館員のみなさんの並々ならぬ努力によって，事は着々と実行に移された。立派な蔵書目録もできた。雑誌新聞総合目録は，各研究室の隅々まで丹念に現物に当って作成されたものである。そして今は，新図書館がキャンパスの一角に美しい姿を誇っている。酷暑の中冷房もない大部屋で手拭を首にぶらさげて図書の整理にいそしまれた光景や，換気扇をつけても去らなかった閲覧室の臭気のことなど思い出すのは，やっと庭付きの家に住んで，間借りであった新婚当時をなつかし

住谷悦治前総長による
旧図書館（現啓明館）のスケッチ

む感傷に似ているであろう。

「びぶりおてか」の創刊は，昭和42年7月1日である。発行回数も少ない小冊子ではあるが，20号をふりかえれば，10年の図書館の発展と充実ぶり，館員のみなさんのたゆみない努力のあとを伝える貴重な資料となっていよう。おびただしい情報の中で，われわれに必要なことは，情報の質的選択であるように思う。図書館が研究情報センターとしての機能を全うされるように，「びぶりおてか」が図書館の今後の発展を明るく伝え続けて行くように，祈ってやまない。

同志社大学図書館のあり方

——びぶりおてか発刊10周年を記念して——

その1

苦言と提言

法学部教授　本間　賢史郎

大学を人間の身体にたとえる場合，図書館は中枢器官に当ると言ってよい。従って中枢器官の機能が停止する時，当然のことながら，身体の働きは中止してしまう。これが大学と図書館の本来あるべき姿である。私の滞米中の乏しい経験からいっても，アメリカの大学では両者の関係はまことに緊密で，大学の機能の中心は図書館にあるといって差支えないように思われる。私がアメリカで勉強していた時，研究の必要から度々図書館に行った。図書館が閉館で中に入れなかったり，探している本がなかったことは殆んど記憶にない。現在でもアメリカのこの大学のことを私は屢々思い出すが，この回想の中には何時も図書館がある。私が受けた数多くの恩恵に図書館の存在は大きい。

翻って同志社大学の図書館を考えてみる時，私は暗胆たる気持にならざるを得ない。大学の図書館は新しく，蔵書数も多く，万事能率化され，旧図書館に比較すると雲泥の相違がある。しかしそれにしても矢張り不満が残る。〝びぶりおてか〟№19に前川嘉門氏が書いておられるように，University of California Berkeley Campus では開館時間は8時から真夜中となっており，休暇中は8時から5時半となっているとのことである。アメリカの大学の場合，大学が所在地の中心となっており，教職員・学生の生活は大学を中心とする円周形の中で行なわれ，その中心が図書館である場合が多い。従って彼等の頭の中には何時も図書館が存在し，図書館なしの生活は考えられないようである。日本の大学はアメリカの大学とは異った風土・環境のもとに生れ育ってきた。同志社の場合，必ずしも京都の雰囲気になじんでいるとは思えないし，教職員・学生の大半は大学の周辺に生活していない関係もあってアメリカの大学と同列に論ずることはできない。しかしせめて大学の図書館としての機能を生かすために，門外漢として一提言することを許されるならば，大学当局・教職員・学生・図書館の四者の連絡協議会を設置して，新しい時代における図書館の機能をさらに生かす方策を論じてみたらどうであろうか。

その2

一利用者から

法学研究科　三品一博

新しいものができるとそれに好奇の目を注ぐ一方，逆に古いものをなつかしむ気持がおこるものである。古い図書館は木造とレンガ造りの二つの建物からなっていた。木造の建物では人が歩くたびにきしむ音がするので，それを少

くしようと人が歩く所にはゴム製の敷物が敷いてあり，また，レンガ造りの建物でも靴の音がコツコツと響くのでなるべく静かに歩こうと気を配ったものである。話をしようとする時はだれかれとなく静かに図書館の外に出たり，その逆に図書館に入ろうとする者は，ドアをあける前に知らず知らずのうちに身を整えて入って行くことが多かったのである。木造のドアはどことなく重みをもっていた。図書館は静かな所でなければならないということを図書館自身が教えていてくれたといえるだろうか。だが，新図書館になってからはこうした光景にはついぞお目にかかったことがない。設備のよさが学生自身を自由に振舞わせているかのようである。（入口の重いドアも 案外軽く感じられているのかもしれない）事実，新図書館はすぐれた機能を備えている。オーディオ室，マイクロリーダー室，ＡＶ室，各読書室閲覧室の配慮等は，多元化した目的に応じるための総合的な機能の追求のあらわれといえるだろう。それに，冷暖房の完備，座席数の増加ということを考えてみれば旧図書館の比ではない。すぐれた研究条件を整えているということは明らかである。だが一方，新図書館にもそれなりの難点があるということは否定できない。たとえば，メインカウンターの前の空間が小さいということがあげられる。開架閲覧の場合は，手にした本の内容を調べるのに座席がいくらでもあるのだが，閉架の図書の場合にはないということである。二，三のテーブルと椅子がメインカウンターと目録コーナーの近くにあれば便利なのではないだろうか。複写の申し込みの場合にもこのことがいえるだろう。また，メインカウンターの前の空間が小さいということをあげたのにはもう一つの理由がある。それは，この新図書館が多元化した目的に応じるという理由のために建てられたのであるにもかかわらず，同志社大学全体の総合目録コーナーがないということである。ここにある目録カードはこの図書館のものしか扱っていない。それ以外のものは，本になってまとめられている目録をメインカウンターで借りることになっている。だが，これでは総合図書館とはいえないであろう。各研究室，人文科学研究所，アメリカ研究所などの目録カードも当然この図書館内に収められるべきである。そうすれば，一目瞭然にして同志社内での本の収容場所がわかり，研究に大いにプラスになるであろう。だが，この総合目録カードを置く場所は果たして確保してあるのだろうか。また，新図書館の暗さということも気になる。外の光がもう少し利用されてもよいのではないか。ライトの数の多さに驚かされるのである。すぐれた機能とは維持費という面も含んでいるのだということを忘れてはならないだろう。しかし，とにかく新図書館は充実した設備である。大いに利用させてもらうと同時に大切にしようと思っている。

その３

現状における図書資料行政の課題

図書館　樋　口　　完

かねて懸案となっていた図書館が３年前に新築され，さらに社会科学センターを目指す法経研究室棟の光塩館も，今や竣工を待つばかりである。学内各部・館・所の所蔵図書資料，利用者に対するサービス，図書費，施設・設備ともに教職員，大学当局など関係者の努力によって徐々にではあるが，年々整備，拡充されてきている。

しかしながら，図書館と各研究室との関係，位置付け等その他検討すべき難問題は多い。現状における問題点，課題と思われる主なものを列挙すると次のようになる。

▽図書資料の組織的・計画的収集

管理，運用並びに予算構成との関係もあって，重要且つ高価な資料（含雑誌のバックナンバー）の収集が不可能であったり，場合によっては利用頻度の低い高価な資料が重複することがある。限られた予算額で，十全的に収集

してゆくためには，部・館・所相互の連絡調整を図る必要がある。また，重要且つ高価な資料が，単一の部・館・所の予算額では入手困難な場合，大学として臨機応変に対応出来る"共通費"的な予算上の配慮も必要ではなかろうか。

▽研究室図書業務担当者の組織の確立・研修・養成

現状において，図書館では，適宜研究室職員を対象として図書業務研修会を開催し，研究室職員の資質の向上に努めているが，多様性をもち，且つ，繁雑な研究室事務の一環として，研究室の図書業務が行われている関係上，研究機能の助成を充分に果していないむきも考えられるので，研究室事務のあり方について検討する必要がある。即ち，図書館との関係を含めて，研究者が求める資料の探索，提供等のサービスを可能ならしめる担当職員の組織の確立，養成が必要である。

▽部・館・所の相互協力（利用）体制

各部・館・所の所蔵する資料は，自ずと当該の部・館・所に帰属するものであるが，最終的には，大学の共有財産として，容易に，相互に，有効に利用出来る体制が望まれる。そのためには，学内所蔵資料・目録（特に旧目録）の整備，施設・設備の拡充，対応する職員の適正な人事配置等が前提となろう。

▽増加する蔵書量に対応する保存（管）の集約化

年々増加する蔵書を単一の部・館・所で常時利用に対応出来るように保存，保管することは，スペースの経済性，労力，製本費等問題が多い。とりわけ各部・館・所で利用頻度の低い，または，重複する図書，雑誌のバックナンバー等については最も適当な部・館・所で保管・運用すること，ないしは，共同書庫の新設，マイクロ写真化等検討の余地がある。

▽図書分類整理業務の改善，強化

図書の分類整理業務のスピードアップ及び未整理図書の整理促進等かねてから望まれているが，増大する印刷情報の時代に対応すべく業務の改善，合理化，人員等業務体制強化の点についても，検討する必要がある。

▽図書館の位置付け，あり方

図書館の使命が教育，研究活動の重要な機関であるとともに総合的な教養の場，及び学術情報センターの役割を果すことにあるとするならば，総合的な管理，連絡調整を行うべき機関として存すべきであろう。しかし，現状では位置付けが弱い。

なお，図書館施設の当面の問題として，地階書庫及び開架閲覧室，雑誌・参考図書室等は，既に満配に近く管理，運用面に支障を来しつつあり，未仕上げ書庫（3階）の早急の着手，完成が待たれている。

などである。

しかし，それぞれ有機的に関連するので，個々に切り離して考えるには難しい課題もあり，すべて経費，人員，施設等を伴なうものであるが，関係者の積極的な取り組み，努力の積み重ねが望まれるところである。各部・館・所の機能，相互の関係を一層明確化することによって機能的な結合も可能になり，研究者をはじめとする利用者に，より効果的なサービス体制を確立することが出来よう。同時に教育・研究条件整備計画の一環として，田辺校地における図書館の建設をはじめ各部・館・所の図書室，資料室，書庫等の整備ならびに拡充がうたわれている点をも併せ，それぞれの位置付け，機能をどうするか，長期的な視野，全学的な視点から考えるべきである。

人名関係調査資料(2)

前号に引続き日本の人名関係資料を紹介します。紙数に大巾な制約があるので利用度の比較的高いものに限定しました。なお，日本の各地方の人名関係資料については資料整備の関係で次回にまわすことにしました。

公卿名鑑・武鑑

39. 公卿補任　再版

吉川弘文館　1964〜66　6冊（新訂増補国史大系第53〜57巻　別巻1）（㊫210.088;K）

明治元年までの参議以上の官と従三位以上の位の補任と年月日を年代順に記載。別巻1は本文中に記されている人名・諡号・法号・称号等の索引。

40. 公卿辞典

坂本武雄編　坂本清和補訂　改訂増補

国書刊行会　1974　183，97P.（㊫281.035;K）

官職・事績の確実な中世以降の公卿・朝臣約2,000人を家柄別にのせ，それぞれ世系，官位，事績，没年を記載。関係人名には参照も付してある。本文の前に家名，字名，称号，法号，雅号，別名などの索引がある。

41. 改訂大武鑑

橋本博編　大武鑑刊行会　1940　6冊（㊫281.035;H）

鎌倉幕府より明治政府に至る各種の武鑑・官員録を年代順に集大成したもので，江戸時代の諸大名や旗本の出自，格式，職務などを一覧式に記した書物で，たいていは氏名，本国，居城，石高，官位，家系，相続，内室，参勤交代の時日，献上拝領の品目，家紋，旗指物，重臣などを記載。

肖像集

42. 明治肖像録

明治館　1898　556P.（㊫982;M21）

明治時代の有名無名を問わず，明治館で写した記念として編集された写真集。上半身の写真で，在住の府県と姓名が記載されている。配列はいろは順。

43. 日本歴代人傑大鑑

内田茂文編　日本調査通信社　1918　100P.（㊫982;N36）

古代より明治に至るまでの人物300余名につき，肖像，略歴を記している。

44. 肖像選集

日本歴史学会編　吉川弘文館　1962　335P.（㊫743.1;N）

古代の聖徳太子にはじまり，明治の西郷隆盛まで160名の著名な人物の肖像集。右頁に肖像の説明と略歴を，左頁に肖像をのせている。

なお，本館にはないが，文化学科に下記資料がある。

45. 国史肖像集成

森末義彰，谷信一編　目黒書店　1940〜41　10冊（㊫743;M7）

皇室編，将軍編，武家編，僧侶編からなる。

肖像については，このほかに「人物叢書」などの伝記資料，「日本歴史大辞典」などの辞典類，また「図説日本文化史大系」や「国民の歴史」「日本の歴史」といった図版の多い歴史叢書類からも発見することができる。

忌辰録・墓誌

46. 忌日索引

読史備要　東京大学史料編纂所編　講談社　1966　P.1935〜2118　（㊫210.03;T2—1a）

皇室及び公卿，武家，釈家，文人など比較的重要な人物の崩，薨，死歿年月日を検出することができる索引で，人名の下にその死歿年月日を記載(ただし，人名は原則として本名としたが，官名，法名，雅号によるものもある)

47. 平安名家墓所一覧

山本東海編　増訂　彙文堂　大正11　98P.（㊫982;Y7）

近世の部より八百数十名の墓地を挙げた初版に百数十名を加え，前版の誤謬を正し，字号等の脱漏を補ったもの。収録者は国文及国歌に長じた人，書詩画医，俳人，儒者など。記載は姓名，没年，享年，墓地，戒名などで，姓名の上欄に職業を付している。

48. 続平安名家墓所一覧

山本東海編　増訂　彙文堂　大正11　98P.（㊫982;Y7）

同じく近世であるが，前編にくらべ更に勤王家，技術に巧みな人々をも加え，明治43年の初版より約200名増加している。巻頭に人名（字，号なども含む）索引あり，前後編併せてのもので頁数の上に○のついているのは前編のもの。

49. 京都名家墳墓録　上，下　附略伝並に碑文集覧

寺田貞次編　山本文華堂　大正11　2冊（㊫982;T2）

京都にある墳墓(皇族を始め各方面一流の人士の墓)の所在を明らかにし，その煙滅を防ぎ参拝の便をはかるために収録したもの。御陵墓（簡略）を除いて約2,000余の名墳を収録。墳墓の位置，高さ，大きさは勿論，故人の略伝，生前の号，歿年月日，享年，碑文などを記載（参考文献も記載），墳墓の写真も所々に入っている。
下巻の巻末に御陵墓，名家，所在地の各50音順索引がついている。
このほかに「攬要大日本御歴代皇記」（㊞981；W）に御歴代山陵（P.689〜719）が収められている。

系譜・家譜

50. 断家譜　第1－3

田畑吉正著　斎木一馬　岩沢愿彦校訂　群書類従完成会　1968〜69　3冊（㊞288.2；D）
慶長から文化までの約200年間に廃絶した幕臣880家の系図をまとめたもの。

51. 新編藩翰譜　全5巻

新井白石著　人物往来社　1967（㊞288.2；A）
新井白石が甲府綱豊（六代将軍家宣）の命によって元禄14年7月起稿，翌15年2月に呈上したもの。慶長5年（1600）から延宝8年（1680）の80年間にわたる全国の万石以上の大名家について，その始封，襲封，廃除等を個別に系図と共に記したものである。続編は白石の志をつぎ寛政元年（1789）から18年間かかって文化3年（1806）に完成したもの。この書は正，続編あわせて新たに編集したもので，それぞれの大名家ごとに譜，系図の順に正編，続編を続けて配列し，各大名家の180年間の推移を通観できるようになっている。

52. 新訂寛政重修諸家譜　全22巻　索引4巻

続群書類従完成会　1964〜67　26冊
（㊞288.2；K）
江戸幕府が集成した寛政10年までの家臣の家譜，系図集である。諸大名，旗本，謁見以上の武士，医師，茶人などの祖宗以来の系図をのせ，家の由来，本支分脈を明らかにし，個々人の略伝，業績を注記した基礎資料。

53. 系図綜覧

国書刊行会　1925　2冊（㊞988；K2－2）
諸家系図纂と東京大学史料編纂掛収集の諸系図により，帝系図と諸家系図150余種を収めている。
諸家系図纂は徳川光圀の命により丸山可澄の編集した系図集で，帝王図は原本は醍醐三宝院の珍蔵本であるが，本書のは帝王系図中最古のもの（応安4年の写本）である。系図中の個々の人には称号，生年月日，事績，略伝などを注している。

54. 姓氏家系大辞典

太田亮著　姓氏家系大辞典刊行会　1934　3冊
（㊞288.1；S）
古来の典籍，文書，記録によって，古代神代から明治以前までの日本の姓氏・苗字を網羅的に集め，起源，分布，本支の関係などを解説した辞典。姓氏を50音順に並べ，なるべく推論を避け典拠を重んじて慎重に紹介している。支流，別流の多い姓は総説についで一々小見出を設けて解説している。家紋のあるものはその図も少し収めている。

55. 尊卑分脈

黒板勝美，国史大系編修会編　吉川弘文館　1957〜64　5冊(新訂増補国史大系　第58〜60巻，別巻2）
（㊞210.088；K）
尊卑分脈は室町初期までの帝王と諸家の系図を集大成したもので，系図中の各人に世系・官位・略伝等を注記してあり，源・平・藤・橘氏をはじめ諸家の姓氏家系や個人の略伝を調査するに欠くことのできない資料である。なおあわせて利用すべきものに「続群書類従」（㊞081；G－2（6－7））系図部収録の「尊卑分脈脱漏」3巻がある。

56. 財界家系図　再版

人事興信所　1957　（㊞988；Z2）
現代の日本財界の主要人物234人の略伝，学歴，業績，逸話，職業，住所を記述し，そのあとに子，孫その他親戚の姓名，職業，住所をあげて写真を入れ，次の頁には各人の家系の図表を記している。巻頭に財界家系図総人名の索引があり，巻末には旧財閥家系譜として三井，岩崎，住友，安田，浅野の系譜表がついている。

皇室・華族

57. 皇室大百科

塩田勝編朝日通信社　1975　512P.
（㊞288.4；K）
本文P.177〜294：歴代天皇の御治績（写真入り）。付録として，歴代皇統譜，歴代遷都表，歴代年号表，歴代天皇御製集，皇基を守護した皇臣五十人列伝（年代順）（写真入り），明治・大正・昭和皇室年表を収めている。

58. 華族略譜　稿本

維新史料編纂会編　国書刊行会　1974　627P.
（㊞288.5；I2）　1913年刊行の複製
弘化3年（1846）より明治4年までの華族各家（朝鮮を除く）の系譜を示したもの。公家では始祖に，諸侯は徳川幕府創立期まで遡って記し，又明治以後樹立した家では先代から記してある。当主の氏名，爵名，官職，世職，秩禄，資格，世系，沿革，事蹟について記載。このほかに，読史備要（㊞210.03；T2－1a）に歴朝一覧，皇室御系譜が収められている。

59. 攬要大日本御歴代皇記

著者代表　渡辺亨　大日本皇紀刊行会　1930　868P.
（㊞981；W）

本書の根幹をなす御歴代要記（P.63〜328）は神武天皇から明治天皇まで上欄に各天皇の御名，御父，御母，降誕，立親王，立太子，践祚，元服，即位，大嘗，皇居，皇后，皇子皇女，崩日，御寿，崩所，御葬，山陵の順で記載し，下欄は在位中の出来事の大要を年表としてつけている。附録として皇統御略譜，宮家御系譜，諸家系譜がついている。このほかに御歴代山陵（P.689〜719）もある。巻末には五十音順による御歴代要紀索引，本朝年号索引がある。

紋　章

60. 皇室の御紋章

佐野恵作著　改訂版　櫻菊書院　1944　147P.
（㊟989；S）
皇室御紋章の類似品が多く濫用されるので真の御紋章を国民にしらせるため書かれたもの。菊と桐の御紋章について述べ，その類似品も実例を挙げて図示している。

61. 日本紋章学

沼田頼輔著　明治書院　1940　1432，54P.
（㊨288.6；N）
各種の戦記類，系譜類，武鑑類にのっている紋章の研究，調査にもとづいて，紋章の一切の事項を解説した最も権威ある家紋研究書。総説は紋章一般の概説，各論は各紋章を系統的に整理し，それぞれ名称，意義，形状種類，姓氏関係などを説明してある。

62. 日本の家紋

進士慶幹，加藤秀幸著　新人物往来社　1969　262P.
（㊨288.6；S）
植物紋，動物紋，器具紋，建造物紋，天文地理紋，文様紋，文字紋，にわけ，紋章の絵入りで説明し，それらを家紋とする氏を挙げている。

難読姓氏・人名研究

63. 人名地名の語源

山中襄太著　大修館　1975　277P.
（㊨288.1；Y）
内容は姓・氏の起源，職業と人名，人名の研究，町名の起源，地名の研究，アイヌ語の地名，難解な人名・地名からなる。

64. 研究史古代の姓

前之園亮一著　吉川弘文館　1976　232，8P.
（㊨288.1；M）
カバネを含むカバネ姓を除き，族姓，人姓，人部姓，部姓，集姓，無姓の六つの姓についての研究。

65. 難読姓氏

日本放送協会放送文化研究所編　再版　日本放送協会　1959　140P.　（㊟982；N34）
普通の音訓によらないもの，多様の発音のあるもの，または通用の広くない特殊な姓氏を採録。昭和10，13年刊行の「難読姓氏，第1，2集」を合本したもので，頭字の音訓索引をつけている。

66. 実用難読奇姓辞典

篠崎晃雄編　増補版　日本加除出版　1973　415P.
（㊨288.1；J－1 a）
前編解説の部，中編名乗りの部，後編姓氏解読の部の3編からなる。前編には苗字と戸籍の歴史，地名と苗字，氏名の文字と読み方などの解説があり，付録として数字，天度，方位等で表示される変った苗字の一覧や人名用漢字表など計13表を収録。中編には命名に必要な命名用漢字の名乗が画別に分類して収録。後編には難読奇姓が頭字の画別に配列されていて，それぞれの姓氏の読み方がひらがなで表わされている。巻末に頭字の所在を検索するための索引がついている。

67. 難読姓氏集成

大野史朗編　東京農業大学図書館　1964　204P.
（農大図叢書2）　（㊨288.1；O）
上代まで遡り，よみ方のむづかしい姓を頭字の画数順に配列し，人名録，辞典など20種の参考書によってそのよみ方を示している。巻頭には見出語画数索引，巻末には名乗一覧がある。

68. 名乗辞典　付録難訓姓氏辞典

荒木良造編　東京堂　1966　306P.
（㊨288.1；N）
訓で読ませる日本人名の読みかたを漢字ごとに実例をあげて示した辞典。前編，後編，余編からなり，前編は漢字を五十音順に並べ，名としての読み方，実例，典拠をあげている。後編は前編に現われる名としての読み方（訓）を音順に並べ，それに用いられる漢字を列記したもの。余編は国字，熟語，洋名，官職位階名を用いた名の読みかたの表。付録の難訓姓氏辞典は姓を画数順に並べて読み方だけを示したもの。

69. 日本の人名

渡辺三男著　毎日新聞社　1971　297，16P.
（㊨288.1；W－2）
内容は人間の名まえ，実名敬避と複合の習俗，出生名と古代人名の類型，人名の大陸模倣，幼名・実名・通称・字・号，人名の階級性と消えゆく雅号，筆名とその類型，一字名，女性の名の移り変り，王朝女流の呼び名，戯名と匿名，追放者の改名と亡命者の変名，ニックネームとその類型，姓名判断は当たるか，いい名まえのねらい，名まえになる地名からなる。巻末には付録，当用漢字・人名用漢字の人名用読み方私案，名まえ索引がついている。

70. 日本の苗字―あなたの祖先を調べる―

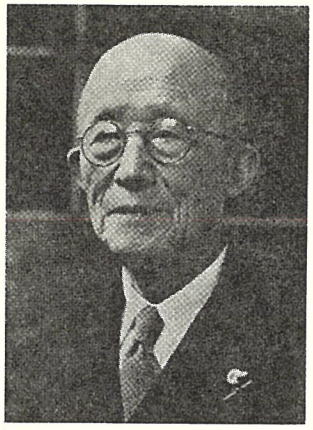
渡辺三男著　毎日新聞社　1964　285，32P.
（㊨288.1；W）
補遺と合せて約4,000氏の苗字を収録。巻末に苗字索引がある。

71. 姓名の研究　付奇姓珍名集　難難姓氏辞典

荒木良造著　文明堂書店　1929　464P.
（㊟988；A4）
わが国の姓名の起源，歴史の大体を述べて姓名に関する概念を与え，次に奇姓珍名と難読の明治以後の姓名を分類して研究の基礎としている。奇姓珍名集は現在生存中に限り，60種に分類（国家，長い姓名，短い姓名など）。記述は姓，名のほか研究の確実性を示すため住所又は勤務先も記している。難訓姓氏辞典は姓とその読み方を画数順に並べている。

同志社大学図書館の歴史（その11）

1940年前後の図書館（1）



第3代館長(総長兼任) 牧野虎次

1935年（昭和10）年，同志社は創立60周年を迎えて，1つのの発展の時期を指向したが，わが国は，つぎつぎと戦争を拡大させて，やがて1941（昭和16）年の太平洋戦争開戦へと，のめり込んで，不幸にも軍国主義一色に塗りつぶされてしまい，キリスト教主義を脊骨とする，わが同志社にとっては創立以来の危機の到来ともなる。しかも1943（昭和18）年の〝学徒出陣〟によって殆んどの男子学生は校門を出て軍隊の営門をくぐってしまい，残留した学生生徒も〝学徒動員〟によって軍需工場や農村での増産に従事し，学業に励む余裕を奪われてしまうのである。そして，1945（昭和20）年には敗戦を迎え，戦後の混乱と衣食住の極度の窮亡の時期を迎えたのである。

このような時期が，当館が図書館の近代化に取りかかった時期でもあり，1940年代も後半に近づくに従って，増加図書数も限少はするものの，約5万冊に及ぶ未整理図書を抱え，その整理が急がれたが，それに要する職員は満たされることなく，少数の職員の肩にづっしりと，のしかかったのであった。そして前回にも述べたように図書館近代化の一つとして，まず『同志社大学図書館分類表』（現在の旧分類）が新らたに制定され，目録についても閲覧用として，著者名・書名・件名を混合して，どのような観点からも希望する図書が検索可能な辞書体目録の編成をめざして改善が進められ，そのための目録法として，当時のわが国図書館界で最も進歩的なものと考えられた『日本目録規則』（1942年版）に準拠し，件名目録についても，わが国で最初に刊行された『日本件名標目表』を基礎として，和洋図書を統一した混合配列による，最も進歩的な目録が指向されたのである。これらの計画が完成すれば，わが国図書館界で最高水準をゆくものとなろうことは疑いのないことであった。しかし，この計画遂行の時期が，戦争と，その後の混乱の時期に当ったことは真に不幸としかいいようのないことであった。しかし，当時の図書館職員の献身的努力によって，やっと著者目録，件名目録及び分類目録が閲覧用として徐々にではあるが利用者に提供されつつあったが，書名目録は未着手のまま戦後となるのである。

一方，このような混乱の時期に，1945（昭和20）年には社会事業の推進に尽力した生江孝之の旧蔵書約1,000点が寄贈され生江文庫が設けられ，1947（昭和22）年には徳富蘇峰の著作・民友社出版図書を網羅した蘇峰文庫1,900冊が，収集者山本二郎の好意によって寄贈され，また浮田和民（歴史学者・校友・元早稲田大学教授）の旧蔵書が浮田文庫として寄せられて，未整理図書は書庫1階に山積されて，整理を待望する状態が相当期間続いたのである。

利用面については，学生数の増減に相応じた数字を示し，戦争末期には常に開館休業の状態となったが1935年前後の時期に夜間開館のことが図書館の現場から提起されたことは書き止められねばならないことであろう。

実例を中心とした
資料のさがしかた —10—
—— 書名目録の利用 ——

書名目録は，もっともよく利用される目録ではないかと思われます。しかし，本館では和書と洋書を混配して書架に収めているため，和書を分かち書きしてローマナイズし，書名目録を編成しています。そのため，利用の仕方で留意すべきことがありますので，例を挙げて説明してみました。

【質問例1】

「人文学」という雑誌があるかどうか，「雑誌新聞目録」で調べたところ，カードがなかったので，他の図書館でどこか所蔵している所がありますか。

＜回答＞

本館に所蔵しています。分類記号は P051；J です。

＜解説＞

質問例は，目録カードの探し方が悪かった一例です。和書を調べる場合，旧分類は内閣訓令式で，新分類はヘボン式でローマナイズして目録カードを配例してあることは，目録を引いたことのある人は御存知のことと思います。しかし，書名が字順（字節式：letter by letter）と語順（語節式：word by word）の二通りの配列の仕方があるのは御存知でしょうか。本館では，書名目録はすべて語順配列をしていることを念頭におき，字順配列と混同しないようにして下さい。字順配列とは，辞典式配列ともいい，辞書における配列のように語のきれめに関係なく，書名の字順に厳密に機械的に配例する方法です。語順配列とは，語によって配列する方法で，まず最初の語によって配列し，同一語の場合は次の語，更に次の語と語を単位に配列する方法で，まず最初の語によって配列し，同一語の場合は次の語，更に次の語と語を単位に配列するものです。下記に具体例を示しましょう。

語順（語節式）	字順（字節式）
Hi no tori	Hi no tori
Hi to mizu	Hitobito ni tsugu
Hito to chojin	Hitokai Iheiji
Hitobito ni tsugu	Hi to mizu
Hitokai Iheiji	Hito to chojin

語順配列ですと，洋書の場合は比較的単語が独立しているのでわかり易いと思います。しかし，日本語の場合は，語と語のきれめがわかりにくいかと思いますが，一般的な語意識を基準に単語分かち書き方式によってローマナイズされていることを記憶しておいて下さい。質問例の「人文学」という雑誌の前後をヘボン式で語順配列で例を示すと次のようになります。

1　人文 jimbun
2　人文地理 jimbun chiri
3　人文学報 jimbun gakuhô
4　人文科学 jimbun kagaku
5　人文論集 jjmbun ronshû
6　人文学 jimbungaku

「人文」も「人文学」も一語としますが，配例は人文の単語の次にアルファベット順に幾つかの単語が並んでから「人文学」という単語が並ぶわけです。人文学（jimbun gaku）とは切らないので人文・人文学・人文学報とはならないのです。

【質問例2】

著者を忘れたので，「蘭学事始」を書名目録で調べたところ，文献索引しかないのですが，本館には所蔵していないのでしょうか。できるだけ原文が見たいのです。

＜回答＞

和蘭事始―「蘭学事始」古写本の校訂と研究―内山孝一著中央公論社1974（㊫402, 105：S3）は貸出中なので「岩波文庫」，「日本古典文学大系第95巻」（㊫918：N），「文明源流叢書第１巻」（㊧081：K10―2）を見て下さい。ただし岩波文庫は館外貸出はできません。

＜解説＞

「蘭学事始」を書名目録で調べても，質問者の言う通り旧分類に文献索引があるだけです。著者目録の杉田玄白で調べると新分類に上述の「和蘭事始（㊫402, 105；S3）と旧分類に「蘭学事始　杉田玄白著 緒方富雄訳」（㊧509, 1：S）が入っています。しかし，新分類のものは貸出中で，旧分類のものは現代語訳であって，求める図書はないかに思われます。しかし質問例のような古典的な著作は，全集，双書類に含まれることが多いことに注意して下さい。古典的な著作がどのような全集，双書に入っているかを調べるには「新版日本叢書索引」（㊫027.1：H）とか「国書総目録」（㊫025, 1：K）などがあります。「国書総目録第８巻」の「蘭学事始らんがくことはじめ」の項をみると「㊥蘭東事始，和蘭事始，㊦岩波文庫，杏林叢書２，大日本思想全集12，日本古典文学大系95，文明源流叢書１，和蘭事始（内山孝一，昭23）古典研究昭和14の８別冊付録，明治２，23版あり」と記載があります。㊥は別書名で㊦は活字本です。書名目録を調べるとき，「蘭東事始」「和蘭事始」でも見なければならないことがわかります。「和蘭事始おらんだことはじめ」を新分類の書名目録で引けば 回答の ものが 出て きます。あとは上記の全集，双書類の所蔵を調べればよいわけです。この他に口語訳のものに「日本の名著第22巻杉田玄白」（㊫081：N3）「世界教養全集第17巻」（㊫081：S7）などにも「蘭学事始」があります。これらは「全集総合目録」や販売カタログなどにより全集，双書類の 各巻の内容を調べて知るわけです。質問例のように古典的な著作は単行本は勿論のこと，特に全集・双書類に含まれることが多いので，全集・双書類を注意して調べて下さい。本館では，全集・双書類の各巻の内容をすべて書名目録に出していないので，特に注意して調べて下さい。また，著名は曖昧な記憶などでなく正確な書名であることは勿論のこと，質問例のように別書名でも調べるようにして下さい。

【質問例３】

「第五回日本帝国統計年鑑」を書名目録で調べましたが，目録カードがありません。図書館にないのでしょうか。

＜回答＞

質問例のような逐次刊行物（年刊，不定期刊などで発行される図書）や体系的出版物は，回次，年度数が表示してあっても，「日本帝国統計年鑑」で目録を引いて下さい。新分類の351：Nにありますので，カウンターで請求して下さい。

＜解説＞

書名の冒頭に本書名活字より小活字で割書等をしたものを「書名冠称」と呼んでいます。例えば「改定版　徒然草総索引」「増補　字源」「類纂評訳 徒然草」「定本 近代短歌史」「続 北村透谷研究」などです。これらのうち，版次，版種などを表わす，「新版」「補正版」「新訂増補」などの用語は書名と見なさないことになっています。それ以外の冠 称 はすべて書名の一部となります。この場合，紛らわしい冠称には２種類の書名から引けるようにしています。例えば資料集成 明治人の観た福沢諭吉」は「資料集成」からと「明治人…」からと２枚の書名目録カードが入っています。しかし，「共同討議 日本に教育はあるか 日本文化会議編 研究社」などは「共同討議」からのみカードが入っているだけですから，正確な書名で調べるように注意して下さい。また，質問例のように「昭和30年度 文化人 名録」「第三回 アサヒカメラ年鑑」などは年度，回次を除いた書名で調べるわけですが，これと同様なものに，「続　北村透谷研究」「前編　昭和文壇史」などの「続」「前編」なども無視して，「北村透谷研究」「昭和文壇史」から書名目録を引いて下さい。新分類と旧分類とでは，書名冠称の取扱いに若干の相違もありますが，わかりにくい場合には必らず係員に相談して下さい。

【質問例４】

「ＯＰＥＣと多国籍石油企業」という本を探しています。書名目録をみてもありません。どこか所蔵している図書館はないでしょうか。アジア経済研究所から出しているものです。

＜解答＞

「松村清二郎著　ＯＰＥＣと多国籍石油企業　アジア経済研究所　1974」（㊫568, 09：M-2)」は本館に所蔵しています。

＜解説＞

質問例のように「ＯＰＥＣ」とか「ＥＥＣ」「ＪＩＳ」「ＳＤＲ」などの略語は一語として扱いますので書名目録の配列はそれぞれの文字の一番最初のところに並びますので注意して下さい。つまりＯＰＥＣではなく，Ｏ Ｐ Ｅ Ｃとそれぞれを一語として扱うわけです。但し原水協，マスコミなどの略語は gensuikyô, masukomi として一語で取り扱います。

ＡＶ室から

―秋の催しについて―

今までＡＶ室ではバッハ作曲「マタイ受難曲」のレコード・コンサートをはじめ，カラヤン指揮「運命」，オペラ「魔笛」等の放映など行なってまいりました。さらにこの秋の企画として下記の如く京都の伝統産業記録映画の上映が組まれています。又，恒常的な企画としてのレコードコンサート等今後の企画に関しましては，館内掲示板をごらん下さい。

10月19日（火）	京版画（きょうはんが）	43分
	截　金（きりがね）	27分
11月25日（木）	ろう型（ろうがた）	40分
	和　鏡（わきょう）	44分
12月21日（火）	数寄屋（すきや）	30分
	京蒔絵（きょうまきえ）	41分

（いずれも午後１時開演）

「視覚障害者録音サービス」について

国立国会図書館では，全国の視覚障害者に対し，館の所蔵する学術文献を録音してサービスすることになっています。

本学図書館は国立国会図書館の趣旨に従い，受付機関となって，その業務を閲覧課，参考業務担当者が分掌いたしております。このサービスを受けようと思われる方は，本人又は，代理者が，本学関係者としての証明を提示して，係員に御相談，御利用をして下さい。

1. 利用の申込みは１回原則として，図書１冊分，逐次刊行物については，１論文です。
2. 録音テープを作成しないもの。
   1) 小説，詩歌，戯曲の類。
   2) 一般的な入門書，概説書，教養書の類。
   3) 教科書，各種試験・参考書の類。
   4) はり，きゅう，音曲その他の実技の指導書の類。
   5) 辞書，事典，年鑑，目録，書誌の類。
   6) 著作権の目的となっているもので著作権者の許諾が得られないもの。
   7) 相当以上の録音時間を要し，他の録音作業に著しく支障をきたすと認められたもの。
   8) 適当な朗読者が得られないもの。
   9) その他，やむを得ない事情で録音テープを作成できないもの。
3. 利用期間は，受領の日から２ケ月以内です。

▷あとがき◁

○ 館報〝びぶりおてか〟は今回で20回目の刊行となりました。発刊から10年目を迎えご寄稿いただいた先生方，ご協力いただいた皆様方に心より感謝いたします。

○ 発刊当時の館長でいらした小橋先生に，10年前をふりかえっていただきました。

○ 総目次をあわせて作りましたのでご利用ください。

○ 今後も20年，30年と続くよう努力いたします。皆様のご協力をお願いいたします。　(Ho, Hi, W)

〝びぶりおてか〟　同志社大学図書館報　No. 20　1976年10月１日 発行
発　行　同志社大学図書館　京都市上京区今出川通烏丸東入　電話 211―2311
編集責任者　楠見愃伸（図書館庶務課長）　印刷　為国印刷㈱